

る被害甚大でトラック島引き揚げ開始。

同年十一月二十四日、マキン守備隊玉砕。二十五日、

タラウ島守備隊玉砕。

同年十二月十五日、連合軍、ニューブリテン島南岸の

マーカー岬に上陸。二十六日、連合軍、ニューブリ

テン島西北端ツルブ地区上陸。二十七日、連合軍機

約五〇機、ラバウル米襲（海軍戦闘機八十五機で迎撃）。

昭和十九年一月十日、連合軍、ブーゲンビル島の航空

基地の使用開始。同月中旬、連合軍のラバウル空襲

激烈化。

同年一月十五日、連合軍、ラバウル東方二〇〇キロの

グリーン島上陸。十七日、米機動部隊、トラック島

大空襲。三月六日、連合軍、ニューブリテン島北岸

のタラセアに上陸。

同年七月七日、サイパン守備隊玉砕。八月二日、テニ

アン守備隊玉砕。八月十一日、ガラム島玉砕。十一

月二十三日、ペリリュー地区隊玉砕。十二月二十七

日、レイテ島決戦。

昭和二十年三月二十一日、硫黄島部隊玉砕。

連合軍は要塞化された海空基地のラバウルを超越し、

東部ニューギニア、西部ニューギニア、マーンシャル、

マリアナ諸島を次々占領し、ボルネオ、フィリピン、

硫黄島、そして台湾を封鎖しつつ沖縄へ上陸したのは

昭和二十年四月一日、同島玉砕は六月二十三日である。

このようにして本土はB29の爆撃下にあり、南方諸

島やラバウルの陸海空軍は包囲下のうち、飢餓と病苦

のうちに終戦を迎えたのである。

海戦に生き抜いた

看護、衛生勤務

静岡県 森田久吉

私の海軍軍歴の概要

昭和十四年六月一日、横須賀海兵団に入団、四カ月の厳しい新兵教育を受け、同年十一月海軍三等看護兵

となる。実技修得のため横須賀海軍病院で半年勉強、

昭和十五年実施部隊配属、水上機母艦（排水量一〇九二九トン）に乗艦、艦船勤務となった。

軍医長以下八人（乗組員一％）、入室患者一人もなく医務の成績は上々だった。本艦は第一艦隊第七航空戦隊であり、南洋方面行動、その秋、横浜沖大観艦式に参加した。

同年十二月十日、横須賀出港、南支沿岸、海南島、仏印方面およびシヤム湾近海警備などを三カ月間、厳しい艦隊訓練や基地訓練を行いつつ、昭和十六年十一月一日呉軍港に入港し、内地へ帰還した。十一月二十四日、同港を出港、寺島水道を経て十二月二日バラオ入港、待機（開戦）。

本艦は比島部隊に属し、重巡洋艦、軽巡洋艦、空母、駆逐艦、水雷艇および特務艦を含め六十数隻、アバリ、ヴィガン、バタアン、レガスピ、ダバオ付近の洋上が任務であった。十二月八日、当部隊は比島攻略を目的としてレガスピ作戦、ラモン湾上陸作戦から始まり、メナド、ケンダリ、アンボン、マカッサル、クー

パン作戦など連戦連勝、わが軍の損害は軽微であった。三月の初めスラバヤ沖海戦に参加し戦果を上げ、三月の末、横須賀港に入港、ドック入り。

昭和十七年五月初め、次期作戦の戦隊に合流のため出港、航行中敵潜水艦の雷撃を受け沈没、味方艦船に収容され横須賀海兵団へ。

昭和十八年四月、第六駆逐隊、駆逐艦「雷」に乗艦、前年水上機母艦を退去した機関中尉と一緒にいる。

七月、横須賀海軍病院高等科練習生、十一月卒業。野比海軍病院勤務。

昭和十九年三月、戸塚衛生学校普通科練習生教育（特志練習生、一期生含む朝鮮、台湾兵）。

昭和二十年五月、第十六突撃隊本部（下田）勤務。
昭和二十年九月、復員。

参戦

昭和十六年十二月七日午後一時、目的地へ向け航行中、艦長訓示あり。そのなかで「我らは目的完遂のため針路を取っている。おのおの部署において、全力を挙げて日ごろの成果を遺憾なく発揮せられたし」とあつ

た。その夜はデッキで待機のごろ寝。翌朝、白むころ、陸戦部隊員上陸準備、艦はラモン湾目指し進行中偵察機を出し索敵、異常なし。

上陸部隊は小艇を降ろすも波が荒く、接岸できそうもない。潮を待てば作戦が遅れるのでやむなく少し離れたところ「ピラフ」に決死隊を出すことになる。すでに出ているのでただ一隻しかでない。看護兵も一人加わり私が行くことになった。若干胸騒ぎがしたが急ぎ支度し飛び乗る。砂浜目がけて進む。ピラフは作戦場所より少し離れているが飛行機の援護と相まって上陸に成功、基地の獲得ができる。まもなく陸戦部隊が続々上陸し作戦は遅れることなく成功した。しょっぱい飯を頬張り、やがて本艦に戻る。機先を制し戦果上々。昭和十七年一月、メナド作戦に入る。飛行機の援護作戦中、戦争の悲惨さに開戦以来初めてぶつかつた。わが軍のパラシュート部隊、目的地降下のため輸送機で飛行中被弾、機首部より黒煙を吐き、機首を下げ墜落態勢、先に飛び下りた人はまずまずで遅れた人は地上との距離が少なく、地面に強く当たり負傷または死

亡する。負傷者が運び込まれ、その顔々、皮膚はなき取られ目鼻は飛び、顔中血だらけ。ちょうど、骸骨が血を流しているようだ。また、ある者は驚きで「アッ」と叫んだか、口の中が火傷で焼けただれ唾液がだらだら出っぱなし。顔も真っ黒、足を小刻みに動かしている。続々收容される。治療を施すが、戦いの敗者の姿はひどく惨めだった。仇敵は必ずと誓い、次の作戦に向かった。

メナド作戦中、僚機と共に母艦を飛び立ち作戦援護に出撃。敵機発見、交戦、これを撃退し帰途中に中尉搭乗機は燃料切れでやむなく海岸の砂浜に着陸を目標し機首を下げていった。ところが海岸の砂浜には子供が遊んでいたのを避けて旋回し砂浜の終わりに近いところへ着陸。勢い余って椰子に翼が当たって止まった。急いで飛行機を降り離れたところに座りこむと右足が痛む（骨折なし打撲その他擦過傷）。マフラーを裂き傷へ巻きつけてから一息つく。さてこれからどうちへ行くか。幸い飛行服に航空地図が入っている。西の方向に陸軍の基地があることは上空で分かっていた。

その基地に向かい足を引きずりながら歩き始めた。夜になり木の根本に寄りかかり目を閉じようとする。

しばらくすると顔を何かがなでる。はっとすると、カメレオンだ。気持が悪くなりそこを離れ、休み休み星を見ながら夜中歩く。そうしているうちに夜が明け、陽差しが強くなるので喉が渇くが、やたらの水は危険で飲めない。我慢して歩くが喉が痛む。帽子の内側につく汗を舐めながらまた歩く。なるべく日陰を狙って歩くと三日目には汗もでない。喉がからからになる。ついに少しは出る小便を手のため、それを飲んだ。

またぼつぼつ歩き、その日も陽がだいぶ下がった。疲れがどつときたので木に寄りかかっていると眠くなり、ボーッとしていると何となく人の気配がする。はっとし夢中でその方向に歩く。空耳だったかとそこに座りこんだ。夕方近くになり眠りかかっていた。そこを陸軍基地の哨兵に見つけられ基地へ収容された。ほんとうに神様、仏様のお陰と思わず手を合わせた。基地の人の手厚いもてなしを受け、足の痛みもほとんど消え、体力も回復し、あの苦しさは夢のようだったと基

地の人びとに感謝し、同基地の船便で帰艦した。

艦長以下全員によく頑張ったと喜ばれ早速医務室へ診察を受けに行った。「あれを飲んだぞ」と同年輩の軍医中尉に話すと、軍医中尉は苦笑いした。

一月二十一日、ケンタリー作戦。二十九日、アンボン作戦。二月六日、マカッサル攻略支援。二月十二日、スターリング湾入港、クーバン作戦に備える。

二月十七日、クーバン作戦、支援作戦が終わり、同月二十七日、スターリング湾出港。三月初めころ、スラバヤ沖海戦従事、おのおのの作戦は敵の出端をくじき、無血の状態に近い成果で一次作戦を終わり、三月二十九日横須賀に入港となる。

昭和十七年五月初め、午後二時の出港予定が遅れ、四時出港のラップも勇ましく勇躍母港を出港した。行路は伊豆大島の内側を通ると聞く。医務室で書類の整理、片づけを終わり、日没前なので上甲板艦橋の下のところに出て、伊豆半島の見えるのを期待し、しばらくしてから望遠鏡を見せてもらった。ちょうど自分の村の海岸、そして自分の家の屋根、またその横の松林

が確認できた。静かに瞑目し故郷の氏神に武運を祈った。下甲板の医務室に降りると、艦内はいつもと変わりなく普通だった。異常なしかと自答し、班長さんの方を見ると、ただ黙々と机に向かい、時折、机の引き出しの中へ目を落とし考え事をしていた。

艦は出港と同時に戦闘配備になる。寝台は使わず（普通は三段ベッド）甲板へカンバス（シート）を敷き、その上にごろ寝、やがて夜も更ける。風もなく静かな波なので艦の動揺も少なかった。どのくらい眠ったか、突如「タカタカタッター」と配置につけのけたましいラッパの音、同時に緊急ブザーが異様な音をたて艦内に流れた。それ！敵襲だ、潜水艦だ、雷撃だ、と思う間もなく「ドカン」と大衝撃があった。それ！と服装を整え懐中電灯を探し取る。とたんにスーッと電気が消えた。消毒した治療用具の入ったケツテルを片手に救急薬品入れを肩に上甲板に急いで出た。真っ黒い顔や手をした兵員が上がってくる。火傷だ。薬品が少ないので急ぎ医務室へ戻り、かき集め上甲板へ上がる。上がると同時にハッチを閉められる。空気

の侵入を防ぎ災禍を止める。そうすると中部、後部より上がってくる兵員は、出ている顔や手が皆真っ黒、痛みをこらえている。手の甲にさわると皮がつるっと剥げる。もう剥げている人もいる。第一関節の先だけ焼け残る。傾いた半月の光、薄明の上甲板での処置、機器類不足、手でその皮をちぎるも半焼けのところではうまく切れない。なるべくそのまま膏剤、油剤をガーゼ等に塗布、患部へ繃帯、仮繃帯（顔の形のようにガーゼなどを使い、目鼻口など穴をあけ、それに薬品塗布、顔全体の火傷等に応用する）も利用し、ただ夢中の応急治療で、三十数人までは覚えていた。

そのころから艦の区画に海水の侵入が激しくなり、傾いた左舷に打つ波は不気味。中甲板より上甲板へ燃える火災はますます強く黒い。上甲板のところどころが薄赤くフライパンのようだ。飛行甲板に繋ぎ止めてある零式水偵が一機、また一機と無残に異様な音とともに海中に沈んでいった。

応急治療がだいたい終わり、後部配置へ行く。昇降口から下を照らすと負傷者一人発見、引き上げ治療す

る。まもなく総員退去の艦長の命令があり、最後の時がきた。各科分隊は患者を先に降ろし、重患はポートへ。ちょっと外せば浮かぶようにする。丸太や角材、足場板、ブイ、浮かぶ物は何でも投下した。後部の同僚を待たせ、傾いた甲板を走り、前部の軍医長以下の様子を見に行く。既に泳いでいて、早くこいとの声を後に後部に向かう。途中班長さんに会う。彼はちょっと待てと戻る。自分は泳がない同僚が待っている、先に行きますと後部へ急いだ。同僚は右往左往して待っていた。

先に降りるからロープに伝わり降りてくるようにと話し、軍服を脱ぎ、艦に過去のお世話を感謝し、黙禱を捧げた後、飛び下りた。三メートルほどの丸太を拾い近寄り、下から同僚に「降りてこい」と叫ぶ。なかなか降りてこないで今度は「降りてこない」と置いていくぞー」と叫ぶ。聞こえたのか、ロープを伝わりながらドボンと落ちてきたがなかなか出てこない。丸太を押しながら待っていると、いつときプカッと出てきた。軍服の襟を掴み上げ、素早く丸太を差し出し、掴

まらせた。溺れる者は薬をもて丸太に乗ろうとするも無理。しかし、急いで舷側を離れなければならない。一牛懸命引っ張るが進まない。同僚は掴まっているだけで足をばたばたやれと怒り怒り引っ張る。気はあせる。そのうち少しずつ進み、人の声のする方へようやく二〇メートル近く進んだ。振り返ると本艦は艦首を大空に突き上げて沈没しようとしている。黙禱し目を開けると、その瞬間サァーと沈んでいった。

薄暗の中、点々と泳いでいる人の方へ行き丸太など縛り合わせ筏にして掴まっていた。「皆声を出せ、眠るな」と互いに声をかけ合う。自分は疲れてくたくただが、手を組み合わせ懸命に掴まっていた。夜が白むころ潮の流れが変わったのか冷たい。よけいに元気がなくなる。体温の消失、肌着の薄い人、またはない人は、だんだん疲れ眠くなる。手が緩み今まで隣にいた人も知らぬ間にいなくなる。

朝日が昇り始めるころ、重巡二隻、駆逐艦が見えた。日が少し高くなったころ、重巡一隻停止、その周囲を駆逐艦が警戒し爆雷を落とした。重巡洋艦の内火艇

(エンジン付きのボート、上陸時使用、あるいは停泊中陸上との定期便に使う小艇)に次々収容され、自分たちは仲間が大勢だったので一番最後に拾われた。内火艇のマフラーに触るが熱を感じなかった。その時八時を過ぎていた。班長さんが見えなかったので「待て」が別れとなったのだろう。班長さん、そして艦と共に逝った人びとのご冥福をお祈りする。

同乗の機関中尉さんは、その後駆逐艦に乗ったが、半年後、私もその駆逐艦に乗り合わせ、回顧し、また共に進級。それぞれ専門学校入学のための退艦も同日という奇縁のひとつまであった。この駆逐艦はスラバヤ攻略戦に同行し、同沖海戦で敵甲巡を魚雷攻撃で沈めた艦である。

スラバヤ沖海戦(怪我の功名)について、同じ行動した駆逐艦の戦果を、一年後、この艦に乗り状況を知らることができた。

昭和十七年一月十一日、バンカ泊地入港、待機中の昼食の時に突然機銃攻撃の音がする。そのうちブウーンと敵の双胴機(ロッキードP39)五機が低空でやっ

てきて、停泊中の艦と艦との間に爆弾を落としていった。照準が狂ったのか、本艦も次の艦も無事。しかし、最後に重巡が一隻、前部主砲および甲板を突き抜け兵員室へ。負傷兵が大分出たのでこれでは戦いにならないと急速、内地呉港に向かった。

二月二十五日ごろスラバヤ攻略に向かう。わが方は船団(陸軍兵乗船)を護衛しながら進む。三月初め、敵四カ国合同艦隊と遭遇、スラバヤ沖海戦となる。敵の砲弾は味方の艦の周辺に届く。水柱が上がったので急ぎ船団に一部護衛をつけ後退させ、残りは攻撃に入るも水雷戦隊は砲が小さく敵艦隊に届かない。蛇行などし、時を稼ぐ。わが方苦戦と電報を打つ。

その電報を受けたのは、一月、爆弾を受け呉港に帰り、整備し南下中の重巡である。急ぎ全速で南下してきた。ちょうどよく、敵の背後に位置して砲弾を浴びせた。敵は砲弾が大きいので日本の主力艦隊がきたと思ひ「それっ」と砲身を反対側に向け、重巡に一斉攻撃を掛けてきた。時刻も夕方になると水雷戦隊への砲撃の手が緩む。ここぞと肉薄、魚雷攻撃をする。敵の

四つの艦隊は挟み撃ちとなったので、体形が崩れ支離滅裂になり、遁走してしまった。本艦は敵重巡洋艦を沈めた。わが重巡洋艦の敵の背後攻めが効を奏した。船団は無事で、上陸作戦は上々であった。

なおこの海戦に参加した水雷戦隊は、その中の一駆逐艦は砲身が真っ赤になるほど撃ち合い、奮戦中被弾し、艦首を破壊され、前部が四角になるも健闘したが沈まず。海戦が終わりバンカ泊地へ向かう。艦首がなくなっているから波を押し分けるのでなく、押し返す。しぶきを高く上げ進むさまの凱旋を遠くから見ても、よく戦えりと拍手を贈った。しかし、その艦もその後修理して出撃、第三次ソロモン海戦で艦歴は終わった。

戦後の邂逅について

水上機母艦を退去し、時流れて五十余年、当艦残存者の一代表の音頭で、同艦「偲ぶ会」の集会（六回目）があった。平成五年五月一日、東京で開催されたので、出席した。

どの人の顔を見ても年月を経たの変わりよう、自己紹介でやっとわかる。そんな中で開会。自分も当時の

配置など含め現況を話した。

乾杯が終わった後、もと機関長が側にきて「お前が探しにきて『誰かいないか』というあの声は、いまま頭の中に残っている。そのお陰で現在の俺がある」と言い、握手を求めてきた。その手を見れば治療の跡が浅黒く、片方の耳は火傷で変形している。ああそうかと当時がい思い出されてきた。振り返ると、あの時の自分たちは上甲板での治療が大体終わり、後部昇降口に行き懐中電灯を照らしながら「誰かいないか」と大声をかけた。聞き入ると、うめき声がしたような気がしたので誰かいるぞ、と思いつながら降りていく。暗闇の中で真っ黒い手、顔、作業衣は重油を浴びてか、真っ黒になった人がいた。

彼は中甲板から這い上がり、もう一甲板上がらねばと思うが、力尽きてか上がれない。もう、どうにでもなれやと横たわっていた。そんな時「誰かいないか」の声に「おい」と答えたという。引き上げの応援を頼み上甲板へ、火傷の手、顔、仮面帯の治療をした。総員退去の時は同僚に助けられながら泳ぐ。途中、仮

面帯がずれ、邪魔になり外したという。数多くの人の治療をしたが五十余年ぶり、初めて患者に会った。八時間あまり泳ぎ、冷潮に堪えて収容されたが、その間に力尽きた者も多い。また、雷撃直後、懐中電灯を探し得たことが、治療等全て好結果になったのであった。思えば生死は紙一重であった。

自分は一看護手として海軍に籍を置き、大東亜(太平洋)戦緒戦から多くの仲間を助けることができ、また、自分も生き還ったことを思えば感無量である。

ニューギニアの苦闘記

佐世保第五特別陸戦隊

高知県 岡田 浩 揮

戦後五十余年を経過し、私も大正十年生まれであるので、ニューギニアの戦記として、佐世保鎮守府第五特別陸戦隊の戦闘体験を執筆するに当たり、巻頭に、謹みて護国のための、瘴癘蕃雨のジャングルの中に、

あるいは南溟の果て、はたまた紺碧の大空に散華された、幾多の同胞の御冥福を祈ると共に、我々は、再び戦争の悲劇を繰り返すことなく、真の世界平和が一日も早く訪れることを心から祈念する次第である。

我々が、ニューブリテン島のラバウルから、イ号潜水艦により輸送され、「決戦場ニューギニア」へ輸送されたのは昭和十八年五月末であった。当時は、陸海軍の柱とも頼む連合艦隊司令長官山本五十六元帥が、ブーゲンビル島上空で米軍P38機により撃墜され、戦没された直後のことであり、ガダルカナル島も、ニューギニア戦局も、米濠連合軍に押され気味であった時であった。従って「決戦場ニューギニア」と記したのである。

潜水艦内から、甲板に出た時の空気の味は忘れることはできない。潜水艦から大発艇に乗り移り、さらにニューギニアに無血上陸。その時、これから続く死闘がどのようなものであるのか知る由もない我々は、上陸を小踊りして喜びあった。上陸した陸戦隊員二〇〇人余りは、我々の先遣隊が悪戦苦闘を続けている基地